

「『毒麦』のたとえの説明」と小標題が掲げられます。この36節からたとえ話の説教の後半部分に入ってゆきます。マタイは冒頭36節から、それまでは湖畔で説教していたイエスを、場所を代えてここからは舞台を家の中に移しています。それは説教対象を群衆から弟子たちのみに変更し、彼らに「たとえの説明」をするという展開に仕上げられています。最初に毒麦のたとえの説明が成されますが、その内容は24-30節のたとえの本体とは著しく異なります。例えば本体では主人と僕の対話を通して、人は悪に対しても性急に結論を出してはいけません。それは良い麦までも傷つけることになってしまうと教えています。ところが本日の箇所では思想内容が変更されてしまっているのです。ここでは本体(24-30)の中心的なメッセージである「現在における共存」という寛容の心は、終末の審判において善悪が屹立するかのように厳しく分けられてゆくのです。もちろん主人と僕の牧歌的なやりとりのプロセスもすべて削除され、ただ結末の刈り入れだけに関心が移っています。当時流行していた終末の到来理解を遠ざけて、あえて現実路線をメインに据えたマタイがなぜこのような描き方を選んだのでしょうか。

ひとつにはマタイが生きた時代と所属していた教会の状況が、おそらくわたしたちの想像を超えるほどひどい環境であったことが推察されます。迫害や差別は他者と共に生きる連帯の力をいともたやすく奪い去ってしまうということです。マタイの時代、原初的なイエスの言葉に励まされて喜びと感謝をもって宣教に生きた時代は昔語りなのです。人々は奉仕の業を恵みとして受け取らず、自己保身や自己目的追求といった利害の中を歩むことを第一に選んだのです。マタイはそんな教会の現状をただ嘆いて放棄してしまうのではなく、それゆえにこそ教会にひとつの警告を発するのです。それは一見すると、人はその行状によって善と悪に分離されるかのように見受けられます。しかし、マタイはここで、たとえの中にイエスを登場せしめてゆくのです。そして種を蒔く

農夫に人の子イエスが宣教するという姿を「わたし」と「あなた」の互いの理解の出発点であることを再確認してゆくのです。ここから歩み出すということ、つまり復活のイエスという贖いの愛にわたしたちは浴していることの喜びから出発することだけが、迫害や差別からの解放ではなかったかという問題提起なのです。いわば先行きてひとり種を蒔かれるというイエスの贖罪に「委ねるという行為」を祈りの中心に据えることを通して現在と未来を見据えよということでしょう。

わたしたちは何でも祈り求めなさい、そして神のみこころを示されなさいといわれます。しかし、みこころを示されるのになぜ祈らねばならないのでしょうか。神が愛であることを信じるなら、みこころとは、今ここにあるわたしたちの姿に現れていると信ずべきでしょう。今ある姿をそのまま受け止めて精一杯生きれば、ほかに一体何を求める必要があるというのでしょうか。祈るとすれば、ありのままが見える思いと、ありのままに生きる従順さの与えられんこと、おそらくそれだけだと思います。マタイが提案する課題とはここにあるのです。祈りとは、そして信仰とは、黙って委ねて耐えて従うことなのでしょう。